



自殺について、遺児、遺族支援について、共に考えてみませんか。

子ども時代に 自殺で親やきょうだいを 亡くした私たちの声 - 全国自死遺児500人調査 -

第2回 中間報告会

2026年3月21日 **土**

現地またはZoomでの参加・アーカイブ動画配信あり

時間 13:00～15:20 ※12:30より開場・受付

会場 岡山県立大学 学部共通棟(北) 8105教室
〒719-1197 岡山県総社市窪木111
・最寄り駅：JR桃太郎線の服部駅下車 徒歩5分
・無料駐車場あり

対象 どなたでもご参加いただけます

参加無料

定員 **120**名

私たちは、2025年の春より、親やきょうだいを自殺で亡くした、当時0～19歳だった子どもの声をきき、そうした子どもたちとその家族に必要な支援（グリーフサポート）のあり方を明らかにすべく「全国自死遺児500人調査」を実施しています。

今回は、本調査の中間報告とグリーフケア・サポートについての講演の場を開きます。本テーマについての専門知識がなくてもご理解いただける内容になっておりますので、多くの皆様に自殺や遺児・遺族支援の現状と課題を知っていただく場になればと願っています。

お申込



申込締切 3/19(木)20時まで

QRコードまたは以下のURLからお申込みいただけます。ウェブでのお申込が難しい方は岡山県立大学 大倉高志研究室までお問い合わせください。

<https://cbbys-report-02.peatix.com>

お問合せ

岡山県立大学 大倉高志研究室
大倉 高志（おおくら たかし）

☎ 0866-94-2208

✉ t-okura@fhw.oka-pu.ac.jp

この中間報告会は、JSPS科研費 基盤研究(C)「0～19歳の時期に自殺で親やきょうだいを亡くした遺族を対象とした聞き取り調査」(課題番号25K05619)の助成を受けたものです。

プログラム

12:30より現地参加者の受付 / Zoomにてオンライン参加者の入室を開始します

13:00～13:05	開会のあいさつ
13:05～14:00	講演「全国自死遺児500人調査 第2回中間報告」 調査代表者：大倉 高志（岡山県立大学 保健福祉学部 准教授） ※講演後に質疑応答の時間を用意しております
14:00～14:10	休憩
14:10～14:50	講演「自死遺児を支える自殺へのまなざしとは」 共同調査者：尾角 光美（一般社団法人リヴォン 代表） ※講演後に質疑応答の時間を用意しております
14:50～15:10	グループでの対話「身近な人を自殺で亡くした子どもたちが 生きやすい社会をつくるために ～今、私ができること～」 ※オンラインの方にも参加できる形でご案内を差し上げます
15:10～15:20	閉会のあいさつ 共同調査者・プロジェクト発起人：豊福 麻記（公立学校講師）

- ・オンライン参加：ミーティングアプリ「Zoom」を使用した参加方法です。質疑応答などの交流を含めオンラインにてご参加いただけます。
 - ・アーカイブ視聴：イベント後、数日中にすべての申込者に対して、本イベントの様子を収録した動画をメールにてお送りします。
- ※アーカイブ視聴のみのお申込も可能です。

登壇者の紹介



大倉 高志 調査代表者 / 岡山県立大学 保健福祉学部 准教授

京都大学 医学研究科 客員研究員、14歳（中学3年生）で父親を自殺で亡くす。企業、精神障害者施設、精神科病院などで勤務後、現職。精神保健福祉士、社会福祉士。全国自死遺児500人調査のリーダー。近著に『自殺で遺された家族が求める支援—偏見による苦しみにへの対応—』ミネルヴァ書房（2020年公刊、2022年度 同志社大学社会福祉学会賞 学術研究部門 社会福祉研究賞受賞）



尾角 光美 共同調査者 / 一般社団法人リヴォン 代表・国際比較社会政策学修士

19歳で母を自殺により亡くし、2006年から全国の自治体、寺院、学校などで講演に呼ばれ、2009年リヴォンを立ち上げる。母の日プロジェクト、遺児支援、僧侶や医療者の研修や教育、小学校から大学までの「いのちの授業」など「グリーンケア・サポートが当たり前にある社会の実現」を目指し、活動している。近著に『なくしたものとつながる生き方』（サンマーク出版）。平成28年度 厚労科研「小児死亡事例に関する登録・検証システムの確立に向けた実現可能性の検証に関する研究」のグリーンケアについて担当。国際比較社会政策学修士。英国バース大学大学院「死と社会研究センター」博士候補生。



豊福 麻記 共同調査者・プロジェクト発起人 / 公立学校講師

5歳の時に父と死別する。大谷大学短期大学部幼児教育科、佛教大学文学部教育学科幼児教育専攻を卒業し、保育、福祉、教育現場で勤務。現在は特別支援学校の講師を勤める。母の死後、30年以上の月日を経て、病死と聞かされていた父の死は「自殺」であったと親族より知らされる。父の軌跡を辿る旅路には、地図（情報提供）と伴走者（支援）が必要であることを実感。過去に戻ることはできないから、未来に届けたいと願うようになり、このプロジェクトに携わるようになる。

【全国自死遺児500人調査】へのご協力のお願ひ：調査終了日2027年3月31日

親やきょうだいを自殺で亡くした当時、0～19歳だった方を対象に、全国500人規模の調査を行っています。死別後に、どのような情報や支援が求められていたのかを明らかにし、今後の自死遺児支援につなげることが目的です。本調査の趣旨にご賛同いただき、情報の周知・発信にご協力いただける方（報道関係者の方など）にも、ぜひご覧いただければ幸いです。詳しくはQRコードまたは下記のURLからご確認ください。

全国自死遺児500人調査ウェブサイト

<https://www.children-bereaved-by-suicide.com>

